

1. 登美子と2人で作った手作りの詩集 2. 大自然に囲まれた相原町の生家 3. 1984年に甥の八木藤雄氏により土蔵を改装して作られた記念館 4. 生前の写真。左から登美子、桃子、重吉 5. 「素朴な琴」が自筆で刻まれた石碑 6. 10月26日の命日に行われる「茶の花忌」には全国からファンが訪れる



特集 2 八木

重吉

生きる力、そして家族愛。
夭逝の詩人、八木重吉

町田市相原に生まれた奇跡の詩人がいる。
29年の短い人生で綴った光の粒のような彼の詩集。
草野心平や高村光太郎、小林秀雄らを魅了し、
今でも多くの人の心を掴んで離さない。

八木重吉記念館 町田市相原町4473 JR横浜線相原駅よりバス20分「大戸橋」下車 042-783-1877(17時～20時) 開館日/水曜・土曜 11時～16時 見学は無料ですが 予約が必要です 8月以降、企画展準備のため休館となります <http://www.jukichi-yagi.org/>
八木重吉企画展 2016年10月22日(土)～12月25日(日) 場所/町田市民文学館ことばらんど

明治31(1898)年、東京都南多摩郡堺村相原で農家の二男として生まれた八木重吉。幼い頃から勤勉でおとなしい性格だった。中学の英語教師をしていた再従兄・加藤武雄の影響で英語教師を志し、横浜師範予科(横浜国立大学の前身)を経て東京高等師範学校(筑波大学の前身)を卒業、英語教師となる。寮生活を送りながら北村透谷を読み更けり、キリスト教信仰を深め21歳で受洗。師範の時に頼まれて家庭教師をした島田登美子に一目惚れ、その後恋文を何通も送り結婚する。重吉24歳、登美子は17歳だった。

結婚後は二人の子どもに恵まれ、人生で一番幸せな時期を過ごす。多くの詩はこの頃生まれた。登美子が買ってきたリボンで綴じた手製の詩集も作った。しかし28歳の時に肺結核に倒れ茅ヶ崎の病院へ入院、その後自宅療養中に29歳の若さで昇天した。

重吉は生前、殆ど無名だった。詩集も発行したのは「秋の瞳」僅か一冊。病床で自選した詩をまとめた「貧しき信徒」を加藤武雄が死後3か月で自費出版、戦時中の昭和17年に彼を愛惜した加藤武雄や草野心平、佐藤惣之助らにより『八木重吉詩集』が刊行。それが

小林秀雄の目に触れ次第に名声を得ていった。現在、刊行された関連書籍は数えきれない。

重吉の詩を世の中に知らしめんと奔走したのが登美子だった。重吉の死後、二人の子どもも結核で相次いで失い、失意のどん底で重吉の遺稿を抱き、その作品を広めることだけが彼女を支えた。後に歌人の吉野秀雄と再婚し93歳の生涯を閉じた。

素朴な琴
この明るさのなかへ
ひとつの素朴な琴をおけば
秋の美しさに耐えかねて
琴はずかに鳴りいだすだろう

重吉の詩はどれもとても短い。無駄な言葉を排除し、優しく、時にストレートに心の中に響いてくる。テーマは家族やふるさと、そして信仰をめぐる葛藤などが多いが、純真で穢れない感受性が言葉の中に映し出されている。

毎年10月26日、重吉の命日に相原に愛好家が集い、墓前に祈りを捧げ、詩の朗読や交流が行われる『茶の花忌』。生家の蔵を改装した「世界一小さい記念館」が人々で溢れかえる秋の一日だ。時を超えて彼の作品は今も多くの人の心の中に生き続けている。